

# 知能テストの結果から見た

## 男女の差

神田 寺幼稚園

崎山 愛子

毎日の保育の中で、私共はしばしば男女の差異という事を痛感させられる。或る一つの仕事をするにしても、男子と女子ではその興味の示し方も違い。結果的に見ても、男子と女子ではその興味の異なるものとなつてくる。この様な男女の差というものが智能発達の間ではどの様な形で現れて来ているか、単に智能指数のみでなく、各種テストについて一つ一つの問題の回答率から、その年齢に於ける発達状態の男女差を考えて見た。

研究を進めるにあたり、今迄行つて来たテストの関係上、三歳児は「乳幼児精神発達検査」四歳児「田中ビネー式智能検査」五歳児「WISC智能診断検査」を使用した。対象人員は、三歳児、男子七四名、女子六二名、計一三六名、四歳児、男子八五名、女子六八名、計一五三名、五歳児、男子一四〇名、女子九八名、計二三八名、総計五二七名である。

一、年齢別の男女差

第一に年齢別に智能指数の面から男女の比較をして見た。(第一表、年齢別IQ分布A、B、C省略)各年齢を通して、平均指数は男子の方が高い値を示しており、特にWISCに於ては、言語性よりも、動作性検査の方により多くの差が見られる。又、分布状態を見ると、女子に、比較的平均発達を示しているものが多いのに対し、高い指数を示すものは男子の方に多く見られる。

(A) 三歳児の場合(第II表A省略)

次に、各々のテストの検査内容から考察して見た。三歳児で取りあげた乳幼児テストの結果から見ると、各問題の合格率を%で現したグラフは、男女共大体同じ様なカーブを示し、特に激しい差は見られないが、総じて、男子が上位にある事がわかる。二八問題中女子が優れているものは「常識問題」、「円の模倣」、「十三の積木を数える」、「模写」、「用途定義」、「釣から輪をはずしてコップを取る」、「六問題に過ぎず、後はすべて男子が高くなっている。特にその差の激しいものに、「記憶問題」、「位置関係」、「椅子を使って物を取る」、「三つの命令」があげられる。「合格率の高いものから順位をつけて見ると、大体年齢順となり、男女間に殆ど差が見られないが、「常識問題」のみが男子では十三位にあるのに対し、女子では8位になっている。」次に同じ合格の中にも、全問題完全に出て合格のもの、一問題不合格でも合格のもの等それぞれ異なるが、各々の問題について得点率を細く調べて見た結果、男女間の差は見られない。たゞ、時間制限を伴う問題では、時間超過の為の不合格者が女子に多く見られた。

(B) 四歳児の場合(第II表B省略)

四歳児田中ビネーテストでは、グラフの示すカーブは大体同じであるが、平均して男子が高い値を示しており、その差は三歳の時よりも多くなっている。女子が優位にあるものは、「玉通し」、「小石の計算」、「絵の解釈」の他低い年齢の「絵単語」、「反対類推」のみである。女子に比して特に男子が高い率を示しているものには「記憶問題」、「絵の完成」、「絵の選択」、「切断図形の組立て」があげられる。合格率の良いものからの順位で男女差のあるものは、男子が上位にある「記憶問題」、「絵の選択」、女子が上位にある「玉通し」、「小石の計算」である。更に合格、不合格の内容を一つ一つ見ると、三歳児の時と違ってカーブのずれが幾つか見られる。同じ合格のものでも、完全に近い率で合格しているものは男子の方に多い傾向が見られる。特に文章の記憶の問題では、 $\frac{3}{3}$ 、 $\frac{2}{3}$ 、 $\frac{1}{3}$ と三段階の合格があるが男子の完全合格率38%に対し、女子は一五%と下っている。

#### (C) 五歳児の場合(第Ⅱ表C省略)

五歳児WISCに於ては、三歳、四歳の時に比し、殆ど男女差が見られないが、しかし少しずつ男子が上位にある事がわかる。中でも言語性の問題より、動作性の問題に、差が大きく現れている。

男子が優れているものは「積木模様」、「組合せ」、「迷路」で、反対に女子が上位にあるものは「符号問題」のみであった。WISCの回答率を更に得点数によって分けて見ると、低い点数や平均点数を取るものは女子が多いのに比し、点数が高くなるにつれて、男子の方が多くなって来ている。

#### 二、項目別の男女差(第Ⅲ表省略)

第Ⅱ表に於ては、各年齢毎にそれぞれのテストから男女の差を見て来たが、次に、その各々の男女差を取りあげて比較して見た。

年齢毎に用いたテストが異なる為、検査内容の問題項目をそのま

ま用いたのでは比較が困難であり、結果的にも判断がしにくいので同じ傾向のものをまとめて、問題を大きく分類し直して見た。分類の項目は、大体WISCの分類をもとにし、更に数項目をつけ加えてみた。

総じて男子が優れている中で、三歳では「一般的理解」、「算数問題」、「単語問題」の言語性のもと、動作性の「模写」で女子の方が良い値を示しているが、四歳では「玉通し」、「五歳では「符号問題」に僅かの差を見るのみとなっている。

又三年間を通じて「一般的智識」、「記憶問題」、「組合せ」、「迷路」はすべて男子が上位である。「一般的理解」、「単語問題」は三歳の時女子の方が高かったのに対し、四歳、五歳になると反対に男子が高い率を示して来ている。各年齢を通して「類似問題」のみは殆ど男女の差が見られない。

以上の結果から、まず第一にあげられる事は、各年齢を通じての男子の優位性という事である。二十項目の中の大半が男子の上位を示しているが、その差は五歳になるにつれて狭って来ている。しかし、差が少なくなって行く反面、女子が男子よりも上位を占める項目は、年齢が進むにつれて減少して行く。

全体を通じて女子が上位にある問題の傾向を見ると「模写」、「玉通し」等の模倣性の強いもの、「常識問題」、「絵の解釈」の様な、自分達の生活の中で身近に経験する問題、単なる智識のくり返し、例えば「13の数を数える」、「符号問題」に限られている。この事から考えても、女子の思考は男子に比し、非常に概念的であるという事が言えると思う。与えられた智識を更に発展させて、進んで新しい場面を理解し、それに適応してゆく能力に欠けている様に思われる。

この事は数の問題を取りあげてみても、三歳の場合の「十三の数

を数える。事は女子の方が良いのに対し、四歳、五歳と進むにつれて、物体との結びつき、加法、減法が入って来ると、逆に男子が高い値を示す結果となって現れてくる。しかしその反面、物事に対する正確さ、緻密さの点に於ては、女子の方が優れているといえる。

又構成的な能力、記憶力の点で女子のおくれが目立っている。

三、同一テストによる変化

以上、智能テストに於る男女差を色々な角度から見て参りました。各年齢毎に取りあげたテストの種類も異り、その対象園児も異なるので、年齢的な発達過程をはっきり掴む事が出来にくいからいがある。そこで、更に三年保育児で現在五歳になる園児三二名を対象として、三歳の時に行った乳幼児テストを再び施行する事によって二年間の変化を見てみた。

(A) 指数分布状態(第IV表A1、2省略)

最初にE・Qの変化を見ると、三歳では平均E・Qがほぼ等しいのに、五歳では男子の方が高くなっている。その分布状態を見ると平均発達以上のものが、三歳では、男二七%、女二九%と大体同じであったのが、五歳になると、女子の大部分が平均発達線内にあり、それ以上のものは五%に過ぎず、男子の二七%に比しずつと低い。

(B) 検査内容の男女差(第IV表B1、2省略)

次に検査内容を見ると、三歳に於ては、今迄の結果とは逆に、女子の方が優位を示し、男子より多くの問題で上位にある。これが五歳になると、男女の差は少なくなつて来るが、三歳の時とは反対に男子が上位にあるものの方が多くなつてゐる。又その内容も年齢が進むにつれて変化している。

一つ一つの問題を取りあげて見ると、男子が上位にあるものは、三歳では、『積木模倣』『記憶問題』『用途定義』であるのに対し、

五歳では、『積木模倣』『組合せ』『三つの命令』『復唱』『立方体模倣』と變つて来ております。一方女子の優れているものは、三歳の時の『組立て人形』『三つの命令』『椅子を使って物を取る』『遊戯の規則を守る』『釣から輪をはずしてコップを取る』『十三の積木を数える』から、五歳では、『組立て人形』『模写』『色球並べ』『迷路』と少なくなつて、内容も變つて来ている。

(C) 项目的の年齢差(第IV表C1、2省略)

次に男女に分けて、同じ問題の合格率の二年間の変化を見ると、言語性、動作性、いずれも三歳では女子が高率を示しているのに、五歳になってほぼ同率になって来ている事は、男子の発達が女子に比して著しい事を示している。特に五歳になって、百分の合格率を示しているものが、男子では、『数唱』『単語』『競争心』『命令に対する適応』と四項目あるのに対し、女子は、『競争心』一問に過ぎない。

又、言語性の方は男女殆ど同じ様なカーブを示して発達しているが、動作性を見ると、男子では、三歳と五歳のカーブが平行線を示しているのに対し、女子のカーブは、『構成問題』と、『組合せ』の所で殆ど同位置にありその間の成長が見られない。

次に二年間の発達の度合の高いものから順にあげてみると、男女共一位の算数問題以下大体似かよつた順位を示しているが、女子が『模写』に高い順位を示し、一方男子では、『組合せ』問題が女子より上位にある点も異つてゐる。しかしこの順位はテストを構成している項目にもより、特に、『一般的知識』が男女共、五歳になって低くなつてゐるのは、問題内容の異なる為と思われる。

以上の結果を総合して二年間の変化を見てみると、女子は男子に比し、のびの少ない事がわかる。又、男子がどの問題も平均した成長を示しているのに対し、女子の成長にはかたよがりが見られる。

一人々々のテストの結果を比較してみると、男子の中でも特に三歳でE・Qの低かったものが最も伸びているのに反し、女子では平均値以上の指数を取っていたものが、五歳になって殆ど落ちている。勿論、対象人員が少い為はこの結果をそのまま、取りあげる事は危険だが、少くとも一つの発達類型を示していると思う。

#### 四、結語

幼稚園での三年間の生活が、幼児に多大な影響を及ぼす事はいう迄もないが、それが男女の差にどの様な影響を与えるものかという事は非常に難かしい問題である。その為には、単に智能の面ばかりでなく、情緒的な発達も加味するし、その他多方面からの考察が必要となってくる。

私共の園は封建的色彩の濃い東京下町にある。この様な地域に於て大家族制度の中で養育されている女子の立場がどの様なものであるか、容易に想像されるであろう。幼児期から絶えず女としての意識を与えられ、女の子だからという枠の中で男子よりも狭い行動を取る事を余儀なくされているという事は、女子の成長にとって大きな損失といわねばならない。

私共は更にこの研究を種々の角度から進めて行く、男女両性のよりに良き成長の為に努力して行きたいと思う。

## 最優秀知能児の特徴

愛育研究所

村山貞雄  
多田淑子  
和田礼子

### 一、序

天才級といわれる最優秀知能児には、どのような特徴があるのであろうか。天才級の児童の研究としては、ターマンやカッテルなどの著があり、わが国では大伴茂氏のものその他がある。

天才級の幼児の特徴をしらべるために、愛育研究所に教養相談に来た子どものうち、鈴木ビネー式個別知能検査法で測定した結果から、知能指数が百五十以上あった幼児百名を抽出して、両親との関係、出生と生育の状態、性格の特徴、教育上の問題などを調査した結果は、つぎのようになった。

この調査における条件児は、愛育研究所に教養相談に来た幼児のうち、(1)鈴木ビネー式個別知能検査法で知能指数が九十七から百三までの者で、(2)前述の百名の被調査者のすぐあとで来所した者を百名とった。

### 二、出生の状態と幼児の知能

**分娩状況** この調査ではかえって天才級のほうに、鉗子分娩や早期破水のかずが多くみられ、天才級の幼児と普通児のあいだに、分娩の正異による差はあらわれていない。

**胎内月数** 天才級の人数は、条件児の人数にたいして、早産の者は半分以下、遅産(月遅れ産)の者は二倍以上となっている。

**受胎月と生年月** 受胎月は、五月受胎の者に、天才級がもっとも多く、生年月は、三月出産の者に、天才級がもっとも多い。大伴茂氏の調査においても、天才学童は三月にもっとも多く生まれており、愛育会の乳幼児精神発達検査の標準化調査においても、三月生れの幼児の知能の平均がもっとも高くなっているが、この調査の結果はそれと符合していた。

**出生順位** 特徴がみられない。